吉野秀雄全集

第七巻

吉野秀雄全集

吉野秀雄全集第七巻

昭和四十五年八月二十五日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者　吉野秀雄
発行者　井上達三
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一－九一
電話　東京(二九二)七六五一(代表)
振替　東京　六－四一二三

印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替いたします

吉野秀雄全集第七巻　目次

病床日録（承前）

昭和四十年……一一
日日飲食録（昭和四十年）……一六
昭和四十一年……三七
昭和四十二年……四三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

晴陰雜記

万葉集裸講義……四九三
盗られた鞄……四九六
酒　談……四九九
続酒談……五〇二
佐渡雜記……五〇六
八高線礼讃……五一四
高崎の思ひ出……五一五
内村鑑三の詩……五一七
上州無智亦無才……五一九
かなづかひ現状……五二四
東京漂泊……五二九
愚　談……五三二
療病の思ひ出……五三五
珍歌漫鈔……五四〇

受刑者の短歌……五四六
歳末酔語……五五三
大童山文五郎のこと……五五六
伊豆の旅から……五五九
越後と私……五六〇
相馬御風大人を悼む……五六三
若い俳人の話……五六五
旅上些事……五六六
わすれ得ぬ土地……五六八
草津湯治昔咄……五六九
詩美鎌倉……五七五
五十歳受験……五七六
とりとめもなく……五八一
蚤……五八四
鵜飼の記……五八八
三河信濃二日の旅……五九四
妙な葉書……六〇七
歌のえにし……六一三

富士と田子ノ浦……六二六
子供の読書……六二三
身辺些事……六二四
浮世ばなし……六二九
三浦三崎雑話……六三七
亡父のこと二三……六四〇
我流デモクラシー……六四二
或る感覚のこと……六四七
歌会始陪聴の記……六五〇
とつておきの記 ―少年・旅の一夜―……六五五
身辺雑話……六五八
桑畑の中のマル……六六三
八十の会・鎌倉の花見……六六五
或る句碑の句……六七一
誤植誤聞の記……六七四
漢字の誤記について……六七五
映画「水鳥の生態」……六七九
身辺些末記……六八三

湘南降雪……六九九
鎌倉春信……六九四
実朝忌に因んで……六九六
新怪談二つ……六九八
解題……七〇三

吉野秀雄全集第七巻

日記Ⅱ・晴陰雑記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

病床日録

（承前）

昭和四十年

一月一日　雨後晴　12°～14°

○暁四時にめざめしに、しとしとと雨声ありて気温高し。新聞整理などしたあと、ウヰスキー少し飲み、六時よりテレビ見る。平櫛田中九十三翁の芸談あり、きき手は勅使河原霞なり。

○八時雑煮、そのあと寝たり覚めたり、正午頃より天気急によくなり、明るく陽光射す。賀状百七、八十通あり、絵葉書と年賀葉書にて二十八枚返事の賀詞かく。

○斉信昭次君一家四人、田中章恵君一家四人年賀に来る。田中智浩君ヴァイオリン弾きてきかす。九歳の幼童なれど、なかなかよささうなり。次いで大佛次郎氏来り、吐瀉つづくよしいふ。また亀井勝一郎氏も高見順氏も癌再発せしよしきく。次いで、久保舜一氏来り、間もなく去り、島田康夫君夫婦来り、また半沢一家三人来る。さらに壮児夫婦来り、島田以下の七人は陽一相手して応接にて夕食。中村琢二氏八幡宮詣での帰途立寄り、すぐ去る。

一月二日　晴　10°～12°

○四時半に起きて『独歩』（魯山人芸術論集）の陶磁のところ読む。ＮＨＫＴＶの新春訪問、けふは棟方志功が出たが非常におもしろかつた。アトリエで下絵描きから彫上げるまでの仕事してみせたが、ものの十分もかからぬ速さだつた。

○賀状六十数通来り、二十七通返事出した。たいへんな努力といふべきだ。

○朝日新聞企画部から速達来り、大佛次郎氏が『パリ燃ゆ』二巻により朝日賞受賞にきまつたこと知つた。

十三日の式と食事に出席せよとのことだが、残念ながらゆけぬと返事出した。大佛氏へ祝ひの手紙かき、陽一に届けさせた。（朝日がなぜわたしのところへいってきたかといふと、三年つづけて推薦したからだ。）陽一曰く、大佛さんは下痢直ったのか今日関西へ発ったらしいと。

○武田葛君夫婦、寺田義信君、年賀に来る。

○発信。大佛次郎（祝詞）○受信　朝日新聞企画部（速）返事出す（速）

〈欄外〉○インドネシア国連脱退を宣言す。

一月三日　晴　7°～9°　夜東京初雪

○三時半に起きて読書。『水甕』一月号。「三木露風雑感」（正富汪洋）、「河上肇の歌について」（湯本喜作）、「河上肇の歌集『旅人』」（安藤彦三郎）、「円空の歌」（熊谷武至）、「埋没の愁歌・長谷川利行」その他。『銅鑼』13号。「津田左右吉博士の神代史研究（一）」（木村時夫）、「西安にて（中）」（長島健）その他。

○NHKTVの新春訪問、東山魁夷（きき手、勅使河原霞）。午後、大山康晴対加藤博二将棋。

○賀状二十通ばかり来り、返事十一通かく。

○陽一は午前十時半小田原へゆく。田中君へ泊る筈。

○小泉俊吉君一家四人年賀に来り、寝床のまま少時間会ひて話す。男二兒大いに成長したり。

○けさ陽一に頼みし葉書、落っこちてゐたとて八幡前の写真屋より届けに来る。陽一、ふぬけと見えたり。

○夜大色紙十枚書き初めした。

○河上肇の歌、

大きなる庭石引きて京に出る牛にも逢ひつ大原の路

手をつかねかうべをたれて何事もなさじといふをなほ打たむ世や

○相馬信子さんより電話、お母さんわるきよし。

一月四日　薄曇　7°～10°

○四時に起きて『アララギ』一月号、『中道』一月号などを読んだ。

○賀状十四通来り、返事八通書いた。

○鵯鳥の声がする。他の鳥の声もする。
○午後二時、新年はじめて後藤先生来り、注射す。一本臀部へカナマイシン、他はインシュリン。
○吉野晋君年賀に来る。病床の傍らでビール、ウォスキーなど飲んで戦時中学徒出陣でマニラ、セブへゆき、戻つて四国の観音寺にゐ、それから北海道の根釧地方で敗戦を迎へ、二十一年四月東大へ再入学し、二十三年卒業するまでの話をした。旧臘タイのバンコックへ社用で一週間ゆき、二十九日に帰つたよし。
○陽一は今日も小田原泊りのよし、瑩子さんから電話あつた。
○夜一度二時間半眠り、十時十五分より日本TVでファイティング原田の拳闘を見た。
○晋君が三井物産の水上達三氏のこと、久松潜一博士のこといつてゐた。水上夫人は高崎高女の出身だといふ。
○鶴ケ岡八幡宮、今日までの四日間に百二十万人の参詣者があつたといふ。八幡宮としても従来なき多数だつたらしい。

一月五日　曇後晴　6°～10°
○かなり寒い。病室6°、台所は3°ととみ子いふ。シベリヤより零下四十度の高気圧日本を襲ひ来つつありといふ。
○朝食のあとまた眠り、十一時半すぎ目がさめたら、上村静枝さん、光ちやんが来てゐた。深さんが去年秋奇禍に遭つて以来、はじめて来訪せしなり、一緒に昼飯代りのすし食べる。
○山崎方代君年賀に来り、ウォスキー出し、余もビール少し飲む。方代君は余りにも余を贔屓しすぎる。
○結子、龍太連れて来る。結子風邪気味にて顔色わるし。龍太は元気なれど、医者に、神経質なれば友だちもたせよといはれしよしなり。夕食を共にす。
○後藤先生来診。静脈注射一、皮下注射一。
○夜、陽一小田原から帰つた。一泊が二泊になつた。
○まだ賀状が来る。返事の賀状八枚書いた。
○毎日新聞夕刊〃心のふるさと〃㊻「牧谿の鶴図」出る。
〈欄外〉○芳沢謙吉逝く（90）。○英詩人T・S・エリ

オット（76）、四日夜逝く。

一月六日　雪　5°～9°　鎌倉の初雪

○四時に起きて便通あり。新聞整理のあと『手紙』上巻（小松茂美）、『書道全集』二五をあちこち見る。五時四十六分かなりの地震あり、一度やんでまたあり。とみ子雨戸を繰るに雪白しといふ。

○歌少し詠む。じりじりと詠んでゆくより外に手はない。

○夜明けてから双眼鏡で庭の雪を見る。まだしきりに降つてゐる。結局二、三寸積つたやうだ。しかし正午近くなつて、薄日さしはじめ、雪はたちまち梢の上や葉の上からしづれ出した。

○賀状十余枚、返九枚。

○午後早く後藤先生来り、注射皮下二本。

○とみ子、髪結ひにゆく。

○『紀ノ川』（有吉佐和子）読む。なかなかよきもの。

○とみ子三色菫の鉢を買つてきた。黄色いチューリップの切花も買つてきたが、チューリップは好まず。

〈欄外〉○朝六時のニュースに地震の報道あり。伊豆大島震度4にてこの地方が震源地らしい。鎌倉は震度2。○花柳章太郎急逝す（70）。

一月七日　くもり後少雨　4°～6°

○四時に起きて『紀ノ川』を読む。そして夕方まで時時読んで二百ページまで進んだ。

○非常にさむく、床にもぐつたが、それでも喘鳴起る。

○賀状四枚かく。もうよからう。

○後藤先生十二時少しすぎ来り、皮下注射二本。

○夕刻、三上次男氏玄関まで年賀に来らる。

○七草までまつたく遊んでしまつた。久しぶりの休養だつた。

○夜、東洋J・フェザー級タイトルマッチ石川六郎対金炫十二回を観た。結果は石川の決定的判定勝ちだつたが、金のパンチ最後まで薄気味わるいほど強く、はらはらした。とみ子は心臓苦しくなり、しまひには眼も耳も蔽つてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.